

思ひ草

第42号

令和5(2023)年11月30日 発行

行動があるから成長できる

～学生の皆さんへ～

健康体育学科教授 おおや りゅうじ 大矢 隆二

よく、新しいことを成し遂げていく人は、その達成や成功を強く思っていると言われます。もう無理とか限界という言葉を安易に使わず、自分の可能性を信じていく。ところが日常では思い通りにいかないことも多く、行きづまることがありますね。しかし、仮にできないことがあったとしても、それは今できていないだけ。諦めず努力を続けていけばきっと目標を達成できる。そういったひたむきさが運や道を開くのだと思います。

京セラ名誉会長の故・稲盛和夫は、著書のなかで「思念が業をつくる」という仏教の教えを紹介しています(生き方、サンマーク出版)。業とはカルマともいい現象を生み出す原因となる。つまり、思ったことが原因となりその結果が現実となって表われてくるのだそうです。

私たちは、日常いくつもの壁にあたることがあります。「無理だなあ」「やってもだめだなあ」と二の足を踏むこともありますが、そこから一步踏み出すことで好転すること

もあるのです。それゆえ、志を決めたら達成や成功を強くイメージし「必ずやる、必ずできる」といった気持ちを持って行動に移すことが重要なのだと思います。何もやらない後悔は、ずっと引きずる場合があるからです。

やってみて成功することもあれば、失敗することもあります。失敗ではないけれどイマイチの結果ということもありますね。しかし、行動を起こしたことは自身の経験値となり、貴重な学習機会になるはずです。また、上手くいってもいなくても、次への対策を立てることができます。加えて、自分と他者との比較をあまりしないことも大事です。人は人、自分は自分だからです。

今回は、学生へのメッセージを込めた内容でしたが、いくつになっても実践躬行(自分自身の力で実際に進んでやってみる)の姿勢を持ち続けたいです。日常の小さなことから「必ずやる、必ずできる」という気持ちを胸に行動する。そんな人でありたいです。

遊び性をつなぐ

子ども支援学科准教授 よしなが あさと 吉永 安里

今、0歳～18歳までの学校段階等間の接続が大切にされています。学校制度は6・3・3制がとられ学校段階は区切られています。子どもの発達も連続的で、個人間差も個人内差も大きく、学校段階の区切りと子どもの育ちが一致するとは限りません。このため保育者や教師は、子どもたち一人一人の特性を理解し、子どもたちの学びを乳幼児期から小、中、高とバトンパスのようにスムーズに速度を落とさずつなぐことに取り組み始めています。

一旦学校教育から離れて大人について考えてみると、大人は自分のしたいことや仕事を探し、学んできたスキル等を使って充実した人生を歩もうとします。そして、夢中になって働いたり、取り組んだりしているうちに、スキルアップしたり、周りから認められてさらに高い目標目指して頑張るようになります。つまり大人になって求められるのは、したいことを見つけ、没頭したり、試行錯誤したり、時に

は他者と協働したりする中で、知識やスキル、思考力などを高め、もっと成長しようとする学びに向かう力なのです。こうした大人に求められる学びを充実させるヒントが実は乳幼児期に大切にされる自発的な遊びの中にたくさんあります。ここでの遊びはお絵描きとか○○ゲームといった遊びの形態のことではありません。したいことを見つけ実現できる環境と一緒に楽しめる仲間の中で、没頭して楽しんでいる状態です。むしろ遊び心あるいは「遊び性」という言葉の方が適しているかもしれません。遊び性は小学校以上でいえば休み時間や放課後ではなく授業の中でこそ発揮されるべきものです。人間開発学部には幸いなことに、乳幼児から初等・中等教育、生涯にわたる多様な学びに関わる学生、教員が集っています。学科を超えて、子どもたちが遊び性を伸び伸び発揮しながら豊かな人生を歩んでいくことのできる力を培う学びのあり方を探究していきましょう。

教育実習



たぬま しげき
田沼 茂紀

見えないものを感じて学ぶ教育実習

初等教育学科教授

教職志望学生にとって、最大のキャリア形成学習となるのが教育実習です。僅か4週間程度の機会ですが、それは自らの将来に渉る教職実践知を臨床体験的に獲得するまたとない学びの場でもあります。

言わば、教育実習とは大学での座学で身に付けた教育的知見を学校教育という具体的な営為の中に身を置くことで臨床的かつ体験的に自分自身の教職適性を検証する場、所謂「為すことによって学ぶ」実践的学習機会であると説明できます。そんな生々しい機会は、教職志望学生にとって自らの将来を左右する試金石にもなるとも捉えられます。つまり、希望すれば誰でもその適性を無視して教職に就けるというものではないということです。例えば、教育実習中に教職へ就くことに違和感を覚えた学生にとっては、他業種に就くことで自らの能力を開花させる可能性に気付くことも大いに考えられます。教育実習に参加したのだから、何が何でも教職に就かなければというのは妄信的な誤謬です。

ならば、その教育実習での教職志望学生一人一人の学びの目的とはいったい何なのでしょう。それは「見えないものを見通す抽象の目を身に付けること」、その一言に尽きます。学校教育の場は、社会の様々な事物・事象を介して人と人とが関わり合うことで「まねぶ」、「学ぶ」という生きて働く資質・能力を身に付けるところに主目的があります。その現象のみを捉えると、具体的な知識やスキルの獲得といった主知主義的な発想に囚われてしまいがちですが、決してそうではありません。そこには、「見えないものを感じて学ぶ」という人間理解に根ざした教育的人間学に根ざした認知能力が必要です。

人格形成という教育的な視点に立つならば、人間社会の営みへの適応という不可解かつ困難な課題解決には見えないものを見る「抽象の目」が必要で、それがあってこそ生きて働く学習が可能となってきます。そんな教育的知見を実習でしっかりと身に付けてほしいと願っています。

特別支援学校教育実習での学び

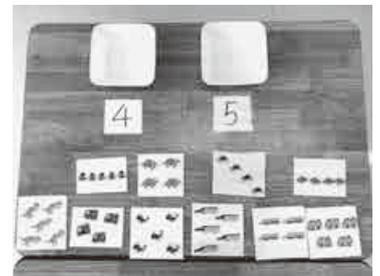
初等教育学科

4年 いけみやぎ はな
池宮城 華

私は知的障害教育部門、中学部二年生の学級で教育実習をさせていただいた。生徒数は4人、会話でやり取りができる生徒の方が少なく、関係性を作っていくことは簡単ではなかった。

私はある生徒の数学の授業を担当させていただいた。その生徒は5までの数がわかるため、その理解をより深めるための教材を作成した。作成したのは数字の書かれたカードと、1から5までの様々な絵が描かれたカードである。例えば車だったら、カードには車が何個あるか数えてもらい、1こなら1のかご、2こなら2のかごに入れる学習をする。またその生徒は話す練習もしているため、数を声に出して読んだり、「できました」と伝えたりする学習も合わせて行った。当初は慣れていない私でも、新しい教材に対し興味を持ってくれたのか、笑顔で一生懸命に取り組んでくれた。しかし、私に慣れてくると、何か気になることがあると学習をやめてしまう姿を見せるようになった。そしてそれを指導すると、机に顔を伏せてやらなくなってしまう。難しい時は授業の半分を動かないその子VS私の手探りな指導という状況に

なってしまった。2週間の教育実習で、信頼関係の浅い私では指示がうまく通らず、どう対応したらよいのか頭を抱える日々は最後ま



教材の写真

で続いた。授業が止まってしまい、今日やりたかった所まで出来ない、私自身も焦りを感じながら、その子が学ぶべきことは、学んでもらわなければならない。その生徒の特性や気持ちの浮き沈みに折り合いをつけながらお互いに探り合っていく、そんな日々だった。この経験を通して、授業とは、シナリオ通りにいくものではなく、生徒も教師も互いに学び、一緒に成長していくものだと強く感じた。

先日、久しぶりに学校に伺う機会があった。一緒に勉強した生徒は、久しぶりに会う私に「先生おはようございます」と元気に挨拶してくれた。生徒も私も苦戦した授業。しかしその時の経験はきっとその生徒にも私にも、今につながる学びを与えてくれたものだと感じている。

教育インターンシップ

出来事背景を考えて

子ども支援学科 2年 小林 愛^{こばやし めぐ}

2年生の6月。初めての体験、教育インターンシップが始まりました。母園である保育所で過ごした2ヶ月は確実に今の私の力となり、学修の手助けをしてくれています。

私は6月から7月にかけての2ヶ月間、1歳児クラスと3歳児クラスに入らせていただきました。園庭で砂遊びをしたり、給食や午睡に立ち会ったり、ベランダで水遊びをしたり等、様々な場面に関わることができました。

1歳児クラス、3歳児クラス共に特に印象に残っているのは「子どもの気持ちを尊重した保育を行っていた」ということです。例えば1歳児クラスでは給食で嫌いなものが出て残した子に対し「少し食べられたね」という受け止め方をしていたり、靴を履く際に頑張れば自分で履けるけれど「先生やって」と言ってきた子に対して「やってって言えて偉いね」と声をかけていたり、3歳児クラスでは水遊びの際濡れる場所の横に濡れない場所を設けて「濡れたくない子」も安心して楽しめる環境構成をしていたりしました。

先生方の肯定的な受け止め方、子どもたち一人ひとりに寄り添った対応だけでも「そのような考え方をすればよいのか」と学びに繋がりましたが、これらの出来事はさらに掘り下げて捉えることができるのではないかと私は思います。「少し食べられたね」の声掛けの前には苦手なものでも少し試してみようかなと子どもが思うような先生方の声掛けがあり、「やってって言えて偉いね」という言葉の背景にはそれまでの何も言わずにやってもらおうとしていた子どもの姿があるのではないのでしょうか。水遊びの環境構成にも全員が水遊びを楽しめるようにという配慮と併せて「濡れたい・濡れたくない」と気持ちが変わった際すぐに対応できる場所があるよう隣合わせにした意図があったのではないかと感じました。

これまで講義の中で「出来事だけでなくその前後や背景も考える」というお話を幾度となく聞いてきましたが、その意味や意義が教育インターンシップを経験してようやく分かってきた気がしています。これからも大変なことはたくさんあると思いますが、物事の流れや背景を考えて、教育インターンシップと同じくらい実りのある実習にしたいです。

教育インターンシップ連絡協議会

令和5年7月6日(木)16:00~17:00に令和5年度教育インターンシップ連絡協議会をオンラインで、開催いたしました。今年度、教育インターンシップに関わる学生は、子ども支援学科66名、初等教育学科92名、健康体育学科35名、計193名おります。

当日は、教育インターンシップ受入れ校・園の先生方が21名出席してくださいました。

まず、太田直之学部長より教育インターンシップの目的と受入れ校・園の先生方への感謝の言葉がありました。その後、大学のスタッフ紹介がなされ、今年度の教育インターンシップの実施状況について、幼稚園・児童福祉施設については、廣井雄一先生、小学校については、小笠原優子先生、中・高等学校については、井田均先生、特別支援学校については、高橋幸子先生より報告がありました。すでに教育インターンシップの実習が始まっている学校・園の先生方からは、どのような実習を行っているか、また学生の実態などについてご意見、ご感想をいただきました。大学にとっても、実習のあり方を考える上で貴重な情報交換になりました。

最後に今後の教育インターンシップ関わる手続きや単位認定等についての説明を行い、次回は令和6年1月23日に「第2回教育インターンシップ連絡協議会・報告会」を実施することを伝え、閉会となりました。

教育実践総合センター 夏季教育講座

令和5年7月30日開催

全ての子供たちの可能性を引き出すために

教育実践総合センター副センター長 **高橋 幸子** たかはし さちこ

人間開発学部教育実践総合センター主催の「夏季教育講座—教育実践フォーラム」は、コロナ禍にあつて令和2年度は中止、令和3年度4年度はオンラインでの開催となりました。今年度は、4年ぶりに対面で開催することができました。なお、オンライン開催時に実施したアンケート結果からニーズの高かつた基調講演についてはライブ配信も併用しました。

テーマは「令和の日本型学校教育を考える」、サブテーマを「個別最適な学びと協働的な学びの実現」として、まずは田村学教授による基調講演が行われました。「個別最適な学びの実現」には、「指導の個別化」と「学習の個性化」により「個に応じた指導」の充実を図ること、そして「個別最適な学び」が探究的な学習や体験活動等を通じて子ども同士の「協働的な学び」として結実していく、それこそが「全ての子供たちの可能性を引き出す令和の日本型学校教育」としてめざされていると、ご説明されました。短時間に多くの映像を交えわかりやすく語られ、フロアからは「もっと聞きたい」という声が漏れ聞こえました。



引き続き、各教科・領域の6つの分科会が開催されました。どの分科会でも、学校現場で主体的・対話的で深い学びの実現に尽力されてきた先生方の豊かな実践の交流がなされました。教科や領域は異なっていますが、一人一人を丁寧に見つめ、教材や指導方法を工夫して授業づくりに取り組むことで「個別最適な学びと協働的な学びの実現」が図られることは共通していると確認されました。「誰ひとり取り残さない」「共に学び合う」を合言葉に今後の教育実践への意欲が喚起された時間となったのではないのでしょうか。

今年度は基調講演のオンライン参加者を含め450名ほどの皆様にご参加いただきました。特に学校、保育現場にて活躍している卒業生の姿が多くみられたことは大変喜ばしいことでした。また、当日の運営に当たっては30名あまりの学生スタッフの協力がありました。どの学生も笑顔で挨拶し、きびきびと動き、細やかな心配りを見せ、講師をはじめ参加者の皆様から、多くのお褒めの言葉をいただきました。卒業生とのやりとり、学生スタッフの活躍、参加者の方々からの様々なご意見やご感想、それらを見つめ耳を傾け、語り合い、うなずき合い、笑みを交わす…対面ならではの良さが改めて実感されるフォーラムとなりました。



今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター

センター長 近藤 良彦 副センター長 高橋 幸子
担当 小笠原優子 井田 均 岩城眞佐子